

平成 26 年度 第3回 槻の木高等学校 槻の木高等学校 学校協議会 記録

<開催日時>平成 27 年 3 月 14 日（土）16:00～18:00

<開催場所> 槻の木高校応接室

<出席者 >

[委員] 澤田 裕 会長、浅野良一 委員、北山茂治 委員、芝井敬司 委員
永田 剛 委員、宮坂政宏 委員

[学校] 平野裕一 校長、奥谷彰男 教頭、小梶芳忠 事務長
山本 尚 首席、田中 眞 首席、奥本雅俊 学習指導室長

◆テーマ1 「本校におけるキャリアガイダンスの模索」

～学校教育自己診断の結果及び先進校の視察を踏まえ～

【学校教育自己診断の結果報告を受けて】

宮坂：自宅での学習習慣があまり身につけていない生徒の特性・特徴がわかれば、対応策が考えられるのではないかと。また、少数だと思うが、学校生活が充実していないと感じている生徒の特性を分析する必要がある。そういう生徒も指導していくことが槻の木の魅力になる。

事務局：数年前までは現在に比べると生徒に多量の週末課題を与えてきたが、週末課題の量と学力の定着とが必ずしも比例しないこともあることや自ら学習に主体的に取り組む姿勢を養いたいという事から、現在はやや量を減らした。その結果、家庭学習時間も減少傾向にあり、ある意味では過渡期である。単純な学習作業と考えさせる学習作業の兼ね合いを考える時期である。卒業した学年は、3年になって学力が伸びた。伸び代をもたせる指導も考えていく必要がある。

校長：今年度は土曜講習のコンセプトの統一を教科会議での議論を踏まえ行ったが、単に学習時間の多寡ではなく、週末課題の質と量について考えることを次年度時間をかけていきたい。

浅野：自己診断の結果について3点申し上げる。1点めは、「考えさせる授業」を急速に展開されていること。2点めは、保護者と生徒のポイントに差異がないということ。そして、3点めが、少し気になる点で、体育大会・文化祭の充実に対するポイントが低い点が疑問である。

事務局：実施直後のアンケートでは肯定的な回答が97%であるが、年末実施の自己診断では5割台になる。他校との比較の結果かもしれない。

芝井：教職員のデータが保護者、生徒に比べ少ないこともあり、数値の変化に過度に反応する必要はないが、一定の傾向はわかる。回答しなかった教職員

の意識にも注意されたい。

校長：教職員対象の結果で肯定的回答が5割前後の項目は重く受け止めている。

「学校運営への意見の反映」について、会議以外でも、アンケートや校長との面談等を通じて意見聴取をしていきたいし、少人数の会議において充実した意見交換をしてほしい。「適性・能力に応じた校内人事」については、次年度20学級規模となり教職員が増加するが、早晩18学級規模の学校になった際、大幅な教職員の減員が予想される。そのことを業務のスクラップ&ビルドをどうするかを来年度検討していく際にも念頭におきたいと思っている。

永田：生徒が自分の考えをまとめ発表する手法を授業に取り入れているというポイントが増加しているが、具体的にどのような取組が行われているのか。生徒指導について納得できないという生徒はどのような点でそのように感じるのか。

事務局：例えば、1年生の英語や3年生の選択の英語では、テーマに沿って考えをまとめて英語で話す授業を行っている。地歴・公民科でも同様の手法を取り入れている。

生徒指導がきちりとしていることを理解して入学している生徒が多いため、叱るというよりなぜいけないのかを理解させる指導に努めている。そういう意味では納得できるというポイントを上げたい。

宮坂：さらに厳しくという生徒の要望なのかどうなのか。不公平感はないのか。

事務局：「私だけがなぜ指導されるのか」という思いが強いようである。

芝井：先生によって叱り方が異なるなどの不公平感があるのかもしれない。

澤田：女子のタイトの上履き靴下の色（注：同色しか許可していない）については、厳しく感じる生徒もいるようだ。

事務局：防寒のために靴下の着用を認めている。他校で柄の靴下の着用が流行していることもあり、靴下の色などで華美を競わせたくない。

北山：他の学校と比較して厳しいという意識が生徒にあると思う。

事務局：まじめな生徒が多いので、注意されただけで叱られたと感じることも多い。

校長：学習方法の改善に関して、職員会議の場で、他校の視察の報告をし情報の共有を図っている。校内でも他教科の改善事例などを報告し共有したり、グループでディスカッションをする機会を設けてもよい。

永田：塾においても、生徒同士での応答トレーニングのメニューを取り入れるなどして行っているが、単に技術論にとどまるのではなく、勉強する際の志をどうしていくかも重要である。これは講師側も全く同様。

【槻の木高校における今後のキャリアガイダンスについての報告を受けて】

浅野：これまで槻の木高校ではキャリア教育という視点での議論があまりなか

った。ポイントは4つある。

- ① コンセプトをどうするか。キャリア教育は狭義では進路指導、広義では生き方探究であり、中央あたりが職業選択になる。何に焦点を置くか。
- ② 体系化が重要。例えば1年で大学の教員の話聞き刺激を生徒に与え、2年で関心のある課題について探究型の課題研究をし、学問に対する興味を起させ、3年で受験に向かったり、その成果を活かしてAO入試を受けるなどが考えられる。このようなつながりをどう作るか。視察の報告のあった日田三隈高校（注：大分県の総合学科高校で、卒業生が在校生の前で「30歳のレポート」として卒業後の自分について発表するという取り組みを行い、槻の木高校の職員が1月に視察した。）も1・2・3年と段階を経て30歳のファイナルステージをむかえる。
- ③ 成果イメージをどうもつか。日田三隈高校の場合は生き方探究である。AO入試で成果をあげる学校もある。
- ④ 槻の木高校は、OB・OGなどの経営資源が乏しい点が課題である。

以上の点を考えると、性急に五月雨式に行うのでは多忙感が増すことになるので、少し整理したうえで実施した方が良いのではないか。槻の木と同様の、進路と結び付けてキャリア教育を行う学校での成功事例を参考にされたい。

宮坂：就職そのものが厳しく、したとしても非正規雇用の拡大や終身雇用の崩壊など、社会の厳しさについて現状を理解することが必要。自分たちの時代は大学の学部での専攻と就職とは乖離していたが、今の学部の在り方は、直近の世の中にマッチしたものになっており、専門学校化してきている。中教審答申にも書かれているように、10年・20年後、今ある職業で残る職種は35%である。その状況に対応できる子どもたちを育てなければならぬ。また、キャリア教育に関しては浅野先生ご指摘の体系化・カリキュラム化が必要。幼・小・中・高・大での接続も見通した育ちを考えておかなければならない。

芝井：キャリアガイダンスのカリキュラム化も最終的には必要だが、槻の木は現在の学習をしっかりとやるということを主眼に置き大学に入って頑張るよう指導をしてきたことを踏まえると、まずは取り組めるところからやってみること。他の先進的な取組を参考に、槻の木に合ったものを考えればよい。その上で、カリキュラム化や成果の評価などの観点はとても重要。大学の教員に過度な期待は禁物で、高校の意図を事前に伝えるための入念な打ち合わせが必要。学部の内容など専門分野については興味深い話が聴けると思う。

宮坂：キャリアガイダンスにこだわらずに申し上げると、大事なことは、事務

局の報告の中で指摘のあった「参加・貢献したいという生徒の意識」、「保護者も含めこういう目的でこういうことをしたいということの共有」、「生徒の実態を踏まえ手作りで作っていくこと」、「継続して成果を積み重ねること」。こういう要素は、学校行事や部活動等を通じてもできるので、そういう経験を生徒がすることでキャリア教育は実施できる。一方で、大学入試やセンターテスト型の学力も大切で、そうすると時間の制約も課題となる。

浅野：いわゆる受験学力の向上とキャリア教育は相いれない部分がある。キャリア教育をやりすぎると、受験がおろそかになる。一定の学力層以上の学校では両者は共存でき相乗効果があるが、槻の木は何らかの工夫が必要。

校長：小学校6年生からの大学入試制度の変化を考えると、今まで通りのペーパーテストの受験対応のままではよいかを危惧している。あまり時間がない中で、新たな試みを行わないと、次の受験体制に対応しきれない。

浅野：資源が乏しいといったが、先生方の意識が授業改善に向いていることは大きな力になりうる。

校長：授業改善については外部講師を招き研修を行うなどのきっかけは与えたが、本校教員の理解度が高く、相当のスピードでいろいろな提案をいただいている。

北山：中学校でのアクティブラーニングの目的と槻の木高校での目的とは多少は異なってくる。中学校では学力幅が広いことから、学力向上はもちろんだが、授業の中で集団作りや生徒指導を行うことも求められている。高校入試も変わり、どんな生徒を育成していけばよいか今の議論を聞き考えているところ。

事務局：日田三隈高校の場合、学校として相当のエネルギーかけ、少数の教員の発案をきっかけに多数の教員に広げる方法を取り、生徒の手作り感がある取り組みであった。エネルギーの割き方と教員体制についてのご助言をいただきたい。

浅野：できることからやることが妥当。

芝井：例えば、大学でのインターンシップでもさまざまなやり方がある。企業に丸投げをする形態もあるが、地域や保護者会と連携して行う形態もある。将来を考えれば、槻の木の場合、コミュニティー高槻市一とのつながりを考えながら進めることが良いのではないか。

北山：高槻市の中学校では二日間程度の職業体験を実施している。

事務局：キャリア教育を行うための教員のスキルとして、教科書のない授業をどれだけ行えるかが問われる。今年実施したような、ホームルームの時間に担任外の教員が20分程度話す機会をもつことが教員にとっては必要。

永田：いま取り組んでいるのが「自考力」。シンプルに自分で考えることが大切。数学でいえば、教わった知識を基に解くのではなく、自ら考え抜いて解けたときの生徒の喜びの話をすると、保護者も納得される。最近保護者との話で反応がよかったのは、手帳を用いたスケジュール管理。月ごと・週ごとの予定とその振り返りの構成になったオリジナルの手帳で、毎週講師がチェックをしている。普通、決まった予定から書くが、隙間の時間をうまく使う段取り能力を育成している。このことは社会人のスケジュール管理に通じるもので、絶えず現実に合わせて修正することも重要。学校でのふだんの学びの中からも、キャリア育成に近づけることはもっとできるはず。自分を振り返っても、高校時代の部活動などの経験が社会人として生かされている。そういうことを伝えたい。

校長：段取りの話は興味深い。生徒にとって勉強は与えられるものにとらえられている。それを払しょくすることは難しいが、隙間の時間を使って自ら勉強する習慣を身につけることができるかもしれない。

◆テーマ2「本校のアドミッションポリシーを模索する」

芝井：当たり障りのないものではなく、ボーダーゾーン内での選抜基準であるから、少しメリハリのあるものであってほしい。同時にそれが受験者へのメッセージになる。例に示されているものでは受験生にとって何で判断されるのかが分かりにくくあまり興味を惹かないのではないか。「槻の木高校は規範を守れる生徒を求めます。」などと明確に書いてほしい。

澤田：まず、こんな生徒を育てたいということを学校が発信し、だから、こんな人物に来てほしいというメッセージを出してほしい。例えば、「当たり前のことを当たりまえにできる生徒を育てるから、けじめのある生徒を求める。」というような書き方が良い。

宮坂：アドミッションポリシーだけではなく、カリキュラムポリシーを明確にし、「〇〇しようとする生徒」や「〇〇ができるような生徒」ではなく、槻の木で3年たったならこうなるといような、モデルになるような生徒を出して示してほしい。

◆提 言

浅野：創立10年が経ち入試制度も変わりギアチェンジの時期に当たる。キャリア教育も槻の木らしさを出してほしい。チャレンジしてみて生徒の反応を見ながら展開で構わない。アドミッションポリシーについては、槻の木らしいキーワードを2、3点は入れてほしい。

北山：学習指導要領が変わっていくに当たって、アクティブラーニングをき

ちりすることがキャリア教育につながる。アドミッションポリシーは中学校としては出来るだけ具体的なものを出してほしい。中学校では進路指導の一環として学校説明会への参加を促しているところで、なぜその学校を選ぶかを明確にしてきている。

澤田：キャリア教育については大学進学が最終目標ではなく、その先にある職業に就くことを見据えてほしい。どのような職業があるのか生徒はあまり知らない。特殊な学部出身者がどのような分野に就職しているのかを聞くことにより職業選択について気付いてほしい。アドミッションポリシーについては、学校としてどんな生徒を育てたいのかを明確にされたい。

芝井：今後、大学入試が大きく変わると言われていて、この変化への対応は必要。ただ、対応に力を注ぎすぎると今までの取組みが疎かになりかねない。本筋を守りつつ新しい課題に対応してほしい。大学入試がトータルとして変わることはないかもしれない。

永田：キャリア教育については、塾も生徒自ら考える学習方法に取り組んでいるが、実績も求められる。塾として教育でまだできていないところに関わりたい。アドミッションポリシーについては具体的なものが望ましい。

宮坂：1点目は、学校教育が公共政策（public administration：PA）の段階から、日本のように new public management：NPM（注：公共政策において民間企業で行われているような経営手法を取り入れることでサービスを提供しようという概念）の段階を経て、イギリスのようなニューパブリックガバナンス new public governance：NPG（注：行政のみならず住民・NPO・企業などがそれぞれが主体として公的事業を担うという統治概念）に進むことを考えておく必要がある。self-improvement school systemとしての学校づくりが求められる。

2点めは、医療構造の変化に対応する大学病院の在り方（チーム医療）に着目している。医療においては 高齢化、疾病構想の変化（治療や処置からケアへ）、医療の高度化、また、医師の多忙化、などに伴い多職種による「チーム医療」の重要性が指摘されているところ。学校でも同様で、「チーム学校」としての対応が期待される。筑波大学の「チーム医療」においては背景として患者本位の考えが貫かれており、これも生徒本位につながると思われる。